万博遺産

橋爪節也
Hashizume Setsuya

第6回　EXPO'70と前衛芸術——具体美術協会と「ハンパク」

［写真上］開館当時のグタイピナコテカ。具体美術協会『グタイピナコテカパンフレット』1962年発行、「具体美術資料委員会資料（1937–1993, undated）」提供／大阪中之島美術館
［写真左］「反戦のための万国博」ポスター（個人蔵）。

お祭り広場にて行われた、具体美術まつりの様子。巨大なバルーンをつけて飛びまわるパフォーマー、スパンコールで覆われた"スパンコール人間"、ロボットやプラスチックカーなどが登場し美術ショーを繰り広げた。
写真提供／公益財団法人 阪急文化財団池田文庫

2022年2月に開館した大阪中之島美術館。
写真提供／大阪中之島美術館

ご興味のある方は　新刊・橋爪節也／宮久保圭祐編著『EXPO'70大阪万博の記憶とアート』（大阪大学総合学術博物館叢書、大阪大学出版会、2021年）もご参照ください

二〇二二年二月、大阪市北区中之島に、待ち遠しかった新しい美術館が誕生した。大阪市制一〇〇周年記念事業の構想から、三十年を経て開館する大阪中之島美術館である。コレクションには、EXPO'70と密接であった大阪発の前衛団体「具体美術協会」の作品も多く収蔵されている。

「具体美術協会」は、一九五四年（昭和二十九）、吉原治良（一九〇五～一九七二）をリーダーに結成された。白髪一雄、村上三郎、嶋本昭三、元永定正、金山明、田中敦子らが参加し、フランスの批評家ミシェル・タピエが海外に紹介し、世界的に評価されるようになる。

一九六二年（昭和三十七）、本拠地である美術館「グタイピナコテカ」を中之島に開設する。食用油会社の社長でもあった吉原が自社の蔵を改造した施設で（吉原没後閉館）、世界的なアーティストであるジャスパー・ジョーンズ、サム・フランシス、ラウシェンバーグや、作曲家のジョン・ケージなどが訪問した。新しい美術館とは目と鼻の先である。

万博で「具体美術協会」は全天全周映画〝アストロラマ〟で知られるみどり館のエントランスホールでの展示と、「お祭り広場」の「具体美術まつり」でパフォーマンスを行った。前衛芸術が万博会場の大衆的な空間に侵入したわけである。

一方、万博前年の一九六九年（昭和四十四）に南大阪ベ平連［*］が、万博を安保条約改定から目をそらすイベントと批判して「反戦のための万国博」（「ハンパク」）を大阪城公園に開催する。当時、学生であった世代（団塊の世代）には、現在でも大阪万博には一度も行ったことのない「ハンパク世代」であることを自負される方が多い。

さらに近年、「ハンパク」に近い立場から「万博こそは、戦後『日本の前衛』がいっせいにそこに結集し、みずから歴史のフロンティアたる前衛を武装解除した『歴史の終り』であったことがわかってくる」という刺激的な意見もある（椹木野衣『戦争と万博』美術出版社、二〇〇五年）。

こうした議論も、EXPO'70がもたらした遺産として認識する必要があるだろう。万国博美術館の系譜をひく国立国際美術館とともに、新しい美術館もまた、EXPO'70を再検証すべき立ち位置の美術館である。

＊「ベトナムに平和を！市民連合」

◆**橋爪節也**（はしづめ・せつや）
大阪大学総合学術博物館教授、同大学院文学研究科兼任。1958年、大阪府大阪市生まれ。東京藝術大学大学院修了。大阪市教育委員会事務局文化財保護課、大阪市立近代美術館（仮称）建設準備室学芸員等を経て現職。専門は日本近世・近代美術史で、『橋爪節也の大阪百景』、『大大阪イメージ 増殖するマンモス／モダン都市の幻像』（創元社）など著書多数。ドラマの時代考証も手がける。